

## 世界観構築の視点を支えるフィクションの働きについて

オーガナイザー 田村 高幸 (Takayuki TAMURA)

千葉大学大学院社会科学研究院

提題者 木田 翔一 (Shoichi KIDA) 千葉大学大学院人文社会科学研究所  
「表現と解釈」

榎野沙央理 (Saori MAKINO) 千葉大学大学院人文社会科学研究所  
「一つの視点によって私たちの視点が被っていることはいかなることか」

田村 高幸 (Takayuki TAMURA) 千葉大学大学院社会科学研究院  
「フィクションは世界観構築手法を与えるものである」

このワークショップは、千葉大学大学院人文社会科学研究所 (2016 年度) 及び同人文公共学府 (2017 年度) の 2 年間で行ってきた研究プロジェクト「存在・真理・フィクションの分析を支える論理構造解明に向けて」の総括として、「世界観構築の視点を支えるフィクションの働き」というテーマのもとで行うものである。その経緯及び概要について述べる。

まず、経緯を述べるために、当該プロジェクトの研究会の概観から始めたい。この研究プロジェクトの研究会は基調講演と総合討論からなり、2 年間で 10 回開催された。回をおって基調講演の演題を挙げると、第 1 回「「存在の論理学」序説」、第 2 回「「指示表現」と情報」、第 3 回「後期ウィトゲンシュタインにおける自己明晰化とアスペクト」、第 4 回「表現の解釈と様態」、「価値規範の生成と現実性—A. ウェストンによる「自然の内在的価値」をめぐる論考の理論上の重要性について—」、第 5 回「論理学システム明晰化のための論理学序説—オーダーメイドの論理学システムの構築に向けて」、第 6 回「論理(学)における正しさとは—論理(学)における規範性を巡って」、第 7 回「ウィトゲンシュタインからカヴェルは何を取り出したのか」、第 8 回「アスペクトⅢ：絵を描くことと絵を見ることについて」、第 9 回「“像の理論” 再考—『論理哲学論考』におけることばと世界の問題を中心に—」、第 10 回「存在・真理・フィクションの分析における論理構造の役割—“視点”の多様性の受容と発展のために」となる。大きく見ると、第 1 回、第 2 回が存在に関するテーマ、第 3 回、第 4 回前半、第 5 回、第 7 回、第 8 回がフィクションやアスペクトに関するテーマ、第 4 回後半、第 6 回、第 7 回、第 9 回が真理、使用 (規範を含む) に関するテーマ、第 10 回が総括と展望、となっている。

そこで、これらの研究会を総括する問いである「存在・真理・フィクションの分析を支える論理構造解明に向けて」私たちはいかなるものを立場、手法等を用意したよいのだろうか。これら 10 回の研究会の成果である使用説・アスペクト生成・概念形成・意味生成についての知見から、フィクションが、「存在」・「真理」・「フィクション」の分析の視点を与えるもしくは支えるという働きをもつものであることが分かってきた。つまり、このワークショップのテーマである「フィクションの働

きは世界観構築の視点を支えるもの」という立場、手法をもって先の問いに答えることができることが分かったのである。また、フィクションについての哲学的分析の多くで、フィクションが「世界観構築の視点を与えるもしくは支える働きをもつもの」とする視点は看過されてきており、この立場から「フィクションの働き」の実質を考察することはとても実りあることではないかとも思った。これら二つの経緯から、オーガナイザーの田村を含む3人の提題者による基調講演「表現と解釈」、「一つの視点によって私たちの視点が被っていることはいかなることか」、「フィクションは世界観構築手法を与えるものである」及び総合討論をもって、ワークショップを行うこととした。以下、提題者のテーマに従って、ワークショップの流れを概観する。

最初の提題者である木田翔一氏は、フィクションの働きを世界観構築の視点を与えるもしくは支えるものとして考察する際に重要となる、特にフィクション生成の根幹をなす表現とその使用の可能性をさぐる解釈の関係の分析を行う。

続いて、次の提題者の槇野沙央理氏は、ある一つの言葉によって言葉の受け手の視点が被っていることとはいかなることであり、そのことを言葉の受け手がどのように積極的に受け止め、言葉の受け手自身の視点の変更、言葉に対して *passive* であるところから言葉への働きかけていくという *active* な立場への移行等一つの言葉に働きかけられる(働きかける)視点の変化に関する内容について考察かつ論じる。

三番目の提題者である田村高幸は二人の提題を踏まえ、アスペクト生成の観点から、

フィクションが世界観構築の重要な手法を与えるものであることについて論じる。

最後に、総合討論を通して、「フィクション」という言葉の使用が被ってきた取り扱いの視点を明晰化するとともに、「フィクション」、「ストーリー」という言葉が世界観構築方法を与える働きをもつことだけでなく、実に多くの実り豊かな知識獲得の方法、知識システム構築の方法を私たちに与えてくれているかについても併せて論じたい。